

# 男・女関係としての宮廷と文学

——『万葉集』の「ますらを」「みやびを」を視座として——

飯田 勇

## 一 はじめに

古代の宮廷は、男・女の性差（ジェンダー）を重要な原理とする空間であったのではなからうか。このことは、例えば、『万葉集』の行幸従駕の歌などに、対をなす男・女がよみこまれていることに注目して考えてもよい。行幸従駕歌において男・女が対として歌われているのは、行幸において、男だけでなく女の存在が必要であったということであり、行幸にわざわざ女性を伴わなければならない理由があったのだと思う。おそらく、行幸においては、宮廷世界をそのままに、行幸の地に移動させることが大切であったのだろう。そして、宮廷を成り立たせている重要な原理の一つが、男・女の性差というものなのであった。だから、行幸においては、男・女の両性の参加が必要にして不可欠であったのだ。もちろん、古代の宮廷のこうした、男・女の性差を原理とするあり方は、『万葉集』が多くの男・女の恋歌を記載していることや、記紀が多くの男・女の恋の伝承を伝えていることと、無縁ではありえなかったであろう。

ところで、律令以後の宮廷においては、男・女のこうしたあり方に変化が見られる。私見によれば、律令制の成立によって、宮廷社会の男・女関係に大きな変化が指摘できるのである。すなわち、男・女の性差を重要な原理として成り立っていた律令以前の宮廷は、律令制の成立によって、男・男を理想的なあり方とする宮廷に変わり、女性は宮廷の表舞台から排除されているのであった。その意味で、律令の官人社会は、社会構造としては、男同士の、極めて同性愛的な社会であったと言えるのである。

本稿では、『万葉集』における「ますらを」や「みやびを」を取りあげ、その具体的な考察を視座として、古代の宮廷社会における男・女関係のこうした変化やそれに伴う文学表現の問題などを、できるだけ詳しく論じてみたい。

## 二 相反する「ますらを」像

『万葉集』の「ますらを」をめぐっては、これまでも少なくない研究が積み上げられてきている<sup>〔1〕</sup>。現在における「ますらを」についての研究の水準は、およそ次のようなものである

う。

名詞。万葉集の用例は複合語を含めて六七例。表記は「大夫」が圧倒的に多く四四首四五例。……用例の多さからみて「大夫」の表記にマストラの意味を見出すのは当然で、西郷信綱（『日本古代文学』）、上田正昭（『日本古代国家成立史の研究』）らによってマストラは令制下の官人層の自負の意識をこめた語とされ、「大丈夫」の約と考えられてきた。稲岡耕二はこれを通時的に検討し、マストラは人麻呂歌集略体歌の用例「健（建）男」が古く、最初は剛強の男の意であって、次いで広く官人層を意味する「大夫」の表記があらわれ、この表記と密着して「大夫」の實質の変化とともにマストラの意味が変化、立派な勇ましい男子の意から官僚男性の意となり、さらに風流・風雅の士の意を含むまでに至り、一方、マストラの古意はマストラケヲという複合語を作ることによって補強されたとする（『万葉集の歌人と作品』）。マストラの語義の歴史的経過はそのとおりであろう。……

ここに研究史が簡潔に述べられているが、『万葉集』の「ますらを」には語義に変化が見られる。それは、稲岡耕二氏が明らかにしたように、端的に言えば、「健（建）男」から「大夫」への変化であり、「剛強の男の意」から理想的な官人の意への変化であった。「ますらを」とは「立派な男子」という意味であるが、専ら官人としての意で使われはじめると、あるべき官人かどうかによるかによって、「ますらを」はそれまでの「剛強の男の意」から変化しはじめたのである。要するに、「立派な

男子」としての「ますらを」は、律令の官人男性を意味するようになつて、それまでの「剛強の男の意」から大きくイメージを変えているのであつた。

本稿の最初の課題は、こうした研究史を踏まえて、古層の「ますらを」と官人としての新しい「ますらを」のあり方とを、男・女関係という視点に立つて、具体的に明らかにすることである。

まず、古層の「ますらを」から考えていこう。取りあげるのは次の歌である。

(1) 世間の 術なきものは 年月は 流るる如し 取り続き  
追ひ来るものは 百種に 迫め寄り来る 少女らが 少女  
さびすと 唐玉を 手本に纏かし（或いはこの句あり、い  
はく、白栲の 袖ふりかはし 紅の 赤裳裾引き いへ  
るあり）同輩兒らと 手携りて 遊びけむ 時の盛りを  
留みかね 過し遣りつれ 蜷の腸 か黒き髪に 何時の間  
か 霜の降りけむ 紅の（一は云はく、丹の穂なす）面  
の上に 何処ゆか 皺が来りし（一は云はく、常なりし 笑  
まひ眉引き 咲く花の 移ろひにけり 世間は かくのみ  
ならし）大夫の 男子さびすと 剣太刀 腰に取り佩き  
猊弓を 手握り持ちて 赤駒に 倭文鞍うち置き はひ乗  
りて 遊びあるきし 世間や 常にありける 少女らが  
さ寝す板戸を 押し開き い辿りよりて 真玉手の 玉手  
さし交へ さ寝し夜の 幾許もあらねば 手束杖 腰にた  
がねて か行けば 人に厭はえ かく行けば 人に憎まえ  
老男は かくのみならし たまきはる 命惜しけど せむ

術も無し<sup>(3)</sup>

(5・八〇四)

この歌で、「ますらを」の男らしき(男さび)は、「剣太刀腰に取り佩き 獵弓を 手握り持ちて 赤駒に 倭文鞍うち置き はひ乗りて 遊びある」く行爲、そしてまた、「少女らがさ寝す板戸を 押し開き い辿りよりて 真玉手の 玉手さし交へ さ寝し夜」の記憶として歌われている。すなわち、「ますらを」は、剣太刀を腰におび、弓矢を手に握り持ち、赤馬に乗って遊びあるく姿や、若い女の寝ている家の戸を押し開き、その女の傍に寄って白い腕を交わして寝る、夜の描写とともに歌われている<sup>(3)</sup>。

「ますらを」の太刀や弓矢を身につけて遊ぶ姿は、(3・三六四)や(3・四七八)など多くの歌に描かれており、これは、勇ましい「ますらを」の表現として類型的なものである。こうした表現は、古層の、「剛強の男の意」の「ますらを」とのつながりにおいて考えるべきであろう。そして、重要なことは、この表現が(1・六一)の歌などからも分かるように、「景としての大宮人」の男性を表現する典型的なものであったということである。つまり、人々が、「大宮人」の男性を、このような存在としてイメージしていたということであり、これは「大宮人」のあるべき理想的な姿なのであった。

また、この歌で、男らしきの対の一方である女らしき(少女さび)が、異伝の注記として「白栲の 袖ふりかはし 紅の赤裳裾引き」と記されていることに注意したい。これは、(1・四〇)や(6・一〇〇二)などの歌を参考によると、「景としての大宮人」の女性を表現する典型的なものであった。山

部赤人は、「大夫は御獵に立たし少女らは赤裳裾引く清き浜廻を」(6・一〇〇二)と詠んで、短歌一首の中に、「景」として、大宮人の典型的な男・女の姿を詠み込んでいる。

ところで、男らしき(男さび)や女らしき(少女さび)が、いわば恋の季節として歌われていることが、とりわけ重要である。男らしきや女らしきは、ヤチホコの神の歌謡を連想させずにはおかない、エロスのな表現、恋の表現と結びついており、その点で十分「性的」な描写となっている。ということ、景としての大宮人」の男・女の表現は、男性性・女性性を示す「性的」な類型表現として理解すべきであることを示している。大宮人としての男・女は、このように「性的」な類型表現によって、歌の「景」として詠みこまれているのであった。

以上のように、「ますらを」の古層の表現には、立派な男子の内実として、勇敢であるという属性とともに、それと不可分なかたちで、女との恋、すなわち異性との交わりが、必要不可欠なものとして存在している。つまり、「ますらを」の条件として、「剛強の男」であるとともに、女性と恋の交渉をもつことが必要なのであった。

ここに確認できたことは、いわば「ますらを」の英雄性にとつて異性との恋愛が必要不可欠なものとして存在するということとであり、ある意味で最初から予想できたことかもしれない。それは、平たく言えば、「色好み」としての英雄の姿である。

ところが、このような「ますらを」像に真っ向から対立する同じ「ますらを」が、『万葉集』に記載されているのだから、やはりこうした確認作業は必要なのであった。

(2)……………大夫と 思へるわれも 草枕 旅にしあれば 思ひ遣る たづきを知らに 網の浦の 海処(あまをとも)女らが 焼く塩の

思ひそ焼くる わが下ごころ (一・一五)

(3)大夫や片恋ひせむと嘆けども醜(と)の大夫なほ恋ひにけり (二・一一七)

(4)健男(まさな)の現(ま)し心もわれは無し夜昼といはず恋ひしわれば (一一・三三七六)

(5)大夫の聡(と)き心も今は無し恋の奴(やつこ)にわれは死ぬべし (一二・二九〇七)

ここに歌われているのは、立派な男子としての「ますらを」は恋などすべきでないという考えである。こうした「ますらを」の用例は、これまで考えてきた「ますらを」像と真つ向から対立している。では、どうして「ますらを」は恋をすべきでないのだろうか。それにしても、積極的に恋をすべき「ますらを」と、一方では恋をしてはならない「ますらを」と、『万葉集』には全く相反する「ますらを」像が存在しているのである。

私見によれば、恋をしてはならない「ますらを」とは、「官人」としての「ますらを」であり、この語が律令官人の意味で使われて特徴的に生じる性格であり表現なのである。すなわち、「ますらを」が律令官人と結びつき、その意味で使われ出したときに、「ますらを」の恋に対する禁忌の表現が成立してくるのであった。次に、そのことを、順序を追って論証してみよう。

### 三 「ますらを」における恋の禁忌表現

「ますらを」における恋の禁忌が歌の表現として成立しているのは、結論から端的に述べると、恋の禁忌が、「ますらを」の天皇(公)に対する忠誠心や奉仕と意味のうえで結びついているからである。すなわち、この表現は、恋を私的な欲望として抑圧することをおして、そのことで、天皇(公)への奉仕を間接的に述べていたのであった。換言すれば、私的な恋の思いを抑えるということによって、天皇(公)に奉仕する官人としての「ますらを」性を表現しているのである。理想的な官人としての「ますらを」は、恋という私的な欲望に負けてはならない存在なのであった。

例えば、先に引いた(5)の歌で、「ますらを」の「聡き心」がないのは、「恋の奴」に自らの心が支配されているからである。そして、なぜ「ますらを」にとって恋の思いに心を支配されるのがよくないかといえば、官人は天皇(公)に奉仕する存在であり、恋というものが、公への奉仕、すなわち「ますらを」であることを、危うくするからに他ならない。ということは、恋というものが、官人が奉仕する公的世界に対して、官人の私的世界の存在と考えられているということであり、また、その恋が官人として慎むべき欲望と考えられているということでもある。つまり、異性との恋は、公に奉仕する官人にとって、抑圧すべき私的な欲望なのである。理想的な官人としての「ますらを」は、私的な恋の思いを断つことによって、立派に天皇(公)に奉仕することができるというのだ。換言すれば、私的

な恋の思いに支配されている男性は、「ますらを」ではなく、  
 官人として失格だという論理なのであった。

ところで、官人である「ますらを」のこうした論理をよく説明するものに、「大君の命かしこみ」という万葉歌の表現がある。

(a) 昼見れど飽かぬ田兒の浦大君の命 恐み夜見つるかも  
 (3・二九七)

(b) 大君の命 恐み大殯の時にはあらねど雲がくります  
 (3・四四一)

(c) 大君の 命 畏み 見れど飽かぬ 奈良山越えて 真木積  
 む 泉の川の 速き瀬を 竿さし渡り ……………

(d) 大君の命 恐み大船の行きのまにまに宿りするかも  
 (15・三六四四)

(e) 大君の 命 畏み あしひきの 山野障らず 天離る 鄙  
 も 治むる 大夫や 何かもの思ふ ……………

(17・三九七三)

このような「大君の命かしこみ」は、すでに指摘されているように、官人の天皇(公)に対する絶対的な服従を意味する表現として成立した。ただし、「ますらを」と同様に、この表現を成り立たせているしくみがこれまで明らかにされていないために、この表現をもつ万葉歌を包括的に説明することができない。

万葉歌の「大君の命かしこみ」の表現は、結論的に言えば、私の欲望が満たされないことを述べて、そのことによって、天

皇(公)への絶対的な服従を表現していたのである。「ますらを」の表現に関してすでに考えてきたように、欲望を私的なものとして抑圧することが、間接的に天皇(公)への忠誠や奉仕を意味していた。それと同じ論理で、「大君の命かしこみ」という表現は、自分の望みが満たされていないことを自らの禁欲として述べて、間接的に、いかに自分が公に忠実であるかを表現しているのである。だから、その満たされない思いは決して不満や不服ではなく、ましてや天皇への恨みの表現などではない。そうではなく、満たされない私的な思いが強ければ強いほど、官人としては公に奉仕していることになり、天皇(公)に対する忠誠心や服従心が効果的に強調されるしくみになっているのであった。

多田一臣氏は、「大君の命かしこみ」が「大君の命」の権威を背景に、行旅の不安を鎮めるあらたな呪語であったとの考えを展開しているが、この表現の方向性は多田説とは少し違っているのではなからうか。例えば多田氏は、(d)の歌に関して、  
 「……………暴風の中、一夜、荒波に翻弄されながらあてどもなく漂流するさまを、「大船の行きのまにまに宿りするかも」とうたっている。その場合、「大君の命かしこみ」を絶対的服従を意味することばととらえると、下句との間に微妙な齟齬が生まれることになる。拒絶のできない命令に従った結果、海上での危険な一夜を過ごさざるをえなくなった、という理解が生じてしまうからである。しかし、これがそのような表現でありうるはずがない。ここでもまた、王権の権威が、心細く不安な海上の一夜を救い取るはたらきをもっていたことを考えるべきなの

である。」と述べている。

この歌において、むろん「下句との間に微妙な齟齬」はない。「拒絶のできない命令に従った結果、海上での危険な一夜を過ごさざるをえなくなった」のではなく、「海上での危険な一夜を過ごさざるをえなくなつて」いる、まさにその危機的な状況こそが、「大君の命かしこみ」すなわち大君に対して絶対的に服従している証だというのが、この歌の表現の論理なのである。つまり、私の生活の不自由さを述べることで、間接的に大君への絶対的な奉仕を表現しているのであった。だから、この歌はやはり、官人の大君への絶対的な服従を述べているのであり、また、そのようによむべき歌なのである。

「大君の命かしこみ」の表現に関して、こうした理解こそが、この語句を含む万葉歌を包括的に説明することができる。それぞれの歌について詳しく見ていく紙面の余裕はないが、いずれの歌にあつても「大君の命かしこみ」という語句は、私の欲望が満たされていないことを内容とする表現と結びついている。繰り返せば、その私的な欲望の抑圧こそが公への奉仕の忠実さを表現しているのであり、欲望を私的な世界のこととして否定することが、官人「ますらを」のあるべき理想の姿だといふのである。

さて、(e)の歌を媒介として、「ますらを」そのものの問題に帰っていくことにしよう。この歌は、大伴池主が大伴家持に贈つたものである。この歌にも「大君の命畏み」に続いて「あしひきの 山野障らず 天離る 鄙も治むる」という、私的な欲望を抑圧する表現が歌われている。すなわち、(本来なら望み

たくないが、大君のために)、山野を苦勞して越えて、都から遠い鄙を治めにやつてきたと歌っている。すでに述べたように、こうした表現は不満や愚痴ではなく、「大君の命畏み」すなわち天皇に対する忠実さ、「ますらを」であることの証を示すものであり、池主も家持のこうした禁欲的な行為を「大夫」だと歌っているのであった。

ところで、その「大夫」が、「大夫や 何かもの思ふ」として、物思いをすべきでないと歌われていることに注意したい。ことは恋ばかりでなく、「ますらを」は物思いをしてはいけない存在でもあった。さらにまた、次のような歌も歌われている。

(6) 大夫ますらをの心は無しに秋萩の恋のみにやもなづみてありなむ

(10・二二二二)

物思いの禁忌に加えて、この歌のように「秋萩」を恋しく思う気持ちも、「ますらを」として相応しくないといふのである。こうした「ますらを」のあり方は、どのように説明されるべきなのであろうか。

以上のような「ますらを」のあり方に関しても、これまで考えてきた表現の論理で説明が可能なのである。すなわち、「物思い」は私の世界のことであり、秋萩を愛することも同様に私的な楽しみなのである。だから、私的な欲望を享受するという意味で、どちらも公に奉仕する官人「ますらを」の慎むべき範疇に属することがらだったのである。

さて、これまで、「ますらを」を主に公(天皇)との関係において考えてきた。今まで見えなかった万葉歌の表現のしくみ

が、これで明らかになったことと思う。ところで、「ますらを」としての性格は、これまで見てきたように、公（天皇）に向かうとき私的世界の禁欲表現として示されるのであるが、恋の対象である女性に向かうときには、自らの「ますらを」性の欠如として示され、それが恋歌の類型的な表現となっている。例えば、先に引用した(2)の歌では、「大夫と 思へるわれも……」として、恋の思いを表現しているのだ。すなわち、一方で、自らの「ますらを」意識の喪失を歌うことが、恋歌の常套表現となっているのであった。

この二つの表現は、つまるところ表裏の関係にあり、一方は私的な世界の禁欲によって公（天皇）に奉仕する「ますらを」の自負を歌い、もう一方は、自分の「ますらを」意識のおぼつかないことを述べて、それによって異性である女性への恋のやみがたさを表現しているのである。

#### 四 官人社会の男・女

これまで「ますらを」をめぐって考えてきたように、律令官人にとって女性との恋は私的な欲望として現われていた。男性の官人は、異性との恋を私的なものとして抑圧することを述べて、「ますらを」の自負を歌っていたのである。ということは、官人社会（宮廷の表舞台）から女性が排除されていたということである。女性は公の世界から排除され、男性の私的な関係として位置づけられているのであった。『万葉集』には、次のような、「ますらを」に関する興味深い歌が歌われている。

(7) 大夫おほおとと思へるわれをかくばかり恋せしむるはあしくはあり

けり

(11・二五八四)

この歌で、「へりつばな官人だと思っている私を、これほど恋しくさせるのは、よくないことだ。」と、男は女を口説いている。こういう恋の表現が成り立っているのは、何より女性が官人社会から排除されているからなのではなからうか。恋のかかる表現は、現代社会において、出世と愛情を秤にかけ、自らの出世を否定することにより女性を口説く男性の恋の表現に似ていなくもない。すなわち、「出世より君が大事だ」と、女性を口説く男性の恋の表現が成り立つのは、女性が出世に関係する社会から排除された存在であるからなのであろう。

ここで、歴史的なアプローチをして、男・女のこうした問題を少し整理しておこう。歴史学の成果によれば、古代律令制の成立は、それまでの「内廷」（天皇の私的機関）から「外廷」（公的機関）への展開として捉えることができるという。すなわち、律令体制とは、「内廷」的な制度から「外廷」的な国家機関へと移行し、それを整備することによって成立したというのである。このことは、例えば、中央や地方の豪族が、「官人」と呼ばれる古代官僚として、国家機構の中に位置づけられていくということであった。

ところで、「官人」は、律令以前の「内廷」的な宮廷にあつては、「官人」（万葉歌では「大官人」とも）と呼ばれていた。「内廷」的な律令以前の宮廷においては、「官人」として、男・女の両性が重要な意味を担っていたと考えられることは、すでに指摘しておいたとおりである。野村忠夫氏によれば、律令制によって男性が「官人」（古代官僚）として位置づけられても、

一方の女性には、「女官」として位置づけられず、「女官」という用語が定着するのは八世紀だという。「内廷」的な特異性を示す「官人」と総称されていたという<sup>(9)</sup>。そして、「女官」という用語が定着した後でも、女性職員の「内廷」的な性格は変わらなかったとも、野村氏は指摘している。つまり、本稿の文脈でこの指摘を考えるならば、律令制によって女性には官人社会（宮廷の表舞台）から排除されたのであり、律令の官人社会は、いわば男社会なのであった。

そして、官人社会が単に男社会というだけではなく、ここでは異性との関係が同性との関係によって相対化されていることが重要なのである。すなわち、すでに考えてきたように、男性官人にとって女性との恋は、官人社会外の私的な関係として位置づけられていたが、そのことは、男同士の関係が官人社会の公的な位置づけとしてあることと表裏なのであり、異性との恋と同性との関係は、社会的な対立の構造として関連づけられている。つまり、男性官人にとって、異性との恋と同性との関係は、同質のものなのであった。律令官人社会が同性愛的だというのは、かかる社会的構造としての謂であり、男性官人同士の間実際に同性愛が行なわれていたかどうかは、もはや重要なことではない<sup>(10)</sup>。

ただ、社会や文化の問題として、律令社会がこのように同性愛的な構造をもっていたということは、やはり必要な認識なのである。例えば、呉哲男氏がすでに指摘しているように、『万葉集』の「交友」の概念の前提には女性の排除があった。これまで本稿が考えてきた文脈によれば、「交友」とは、官人社会

の公的な関係として、私的な異性との恋に優越する、男同士の交わりを意味する。そして、官人にとって、その理想的な男同士の関係が、「思ふどち」という万葉語なのである。異性との恋に対する優越という構造が隠されているとすれば、男同士の「交友」は、友情などと言うより、やはり同性愛的なのである。ともかく、万葉の「交友」を中国文学の影響から考え、それとの比較により、中国文学の表現の側から説明するだけでは十分でないのである<sup>(11)</sup>。

この時代、文化のあり方が男・女の性差（ジェンダー）によって表され、それによって棲み分けられていたことは、よく知られている。例えば、漢詩文は男の文化であり、一方で、物語や和歌は女の文化であった。こうしたあり方を、本稿が述べてきた視点に立つて改めて考えてみると、律令の官人社会から女性が排除されたということは、和歌が公的な場から私的な場へと転じたことを意味する。これは、恋の文化が私的な世界の存在となったこととほとんど同値である。ということは、かの有名な、『古今和歌集』の仮名序が言う、和歌が「まめなる所」から離れ「色好みの家」に限定されていくということ、すなわち和歌が公的な世界から私的な恋の世界のものになったということ、律令官人の成立という点から考えることができるということである。そして、このように考えることができるということは、本稿が最初に述べた、律令以前の社会では男・女の両性が宮廷の重要な原理であったという考えが、和歌がもとの公的存在であったという古今集の仮名序の指摘によって、裏付けられるということでもある。



律令社会になり公的な性格を失っていた和歌を、「交友」という世界を導入して、もう一度公的な性格のものに高めようとしたのが、大伴旅人であった。<sup>(1)</sup> その場合、「交友」という方法の導入によって、男・女の文化である和歌的世界に男・男の公的な関係を持ち込んでいることが重要である。つまり、和歌に中国の漢詩文的な文人世界を導入することは、和歌の世界に男同士の公的な関係を持ち込むことなのであり、漢詩文的な文人世界の導入という現象だけでなく、そこに隠されている、男同士の公的な関係という意味を見落とすべきでない。

律令官人社会が女性を排除している事実は、いろいろな点で重要である。「遊行女婦」を宮廷の女性の承譜から考える説は、やはり基本的に正しい。『万葉集』において宴席などにあつて「官人」と歌をやりとりしている「遊行女婦」は、宮廷における女性が、「官人」の私的な関係に転じた姿なのである。かつて男性とともに宮廷の文化の重要な担い手であつた女性は、律令の官人社会になって、男性官人の私的な関係として、酒宴の席での恋の相手へと転じていたのであつた。

## 五 「みやびを」と「ますらを」

さて、これまで宮廷の男・女について考えてきたが、これに關して、興味深い歌が『万葉集』の卷二に載っている。それは、石川女郎と大伴田主との贈答歌である。

①遊士みやびをとわれは聞けるを屋戸やど貸さずわれを還かせりおその風流士みやびを

左注によれば、

作歌事情はこうであつた。大伴田主は、容姿

が美しく洗練された感覚の持ち主であり、見る者伝え聞く者が、田主にみな感心したという。石川女郎という女がいたが、田主に対していつしか結婚を望み、ひとり寝を憂えるようになった。ひそかに便りをしようと思つたが、その機会に恵まれなかつた。そこで一計を案じ、賤しい老婆の姿をして、鍋を持つて田主の寝所に近づき、口ごもり足をふらつかせながら、戸を叩いて、「東隣の貧しい女ですが、火を借りに来ました」と言つた。田主は、暗やみで身をやつした姿がわからず、女郎の求婚の意図に思いも及ばなかつた。田主は言われるままに火を取つて、女郎を帰らせてしまつた。翌朝、女郎は自らおしかけていったことを恥じ、目的を遂げなかつたことを恨めしく思つた。そこで、この歌を作つて冗談をいつたのであつた。そして、その歌に対する田主の返歌が、

②遊士みやびをにわれはありけり屋戸やど貸さず還かしわれを風流士みやびをにはある

なのである。

この贈答歌については、小島憲之氏をはじめ、主に典拠論の立場からかなりの研究がなされている。しかし、典拠の問題とは別に、この贈答歌を『万葉集』において位置づける必要があるだろう。換言すれば、中国文学による影響という視点だけでなく、日本文学の側からも考えるべき問題があるのだ。中国に典拠があるとしても、それを受け入れている日本の側の文化や作品のコンテキストがあるはずであり、その研究がなされなくつてよいわけではない。本稿では、この贈答歌を『万葉集』の表現によつて読み解き、日本の文化や作品の問題として、これまで

の研究とは異なつた方向から考えてみよう。

この贈答歌には、「みやびを」(風流士)をめぐつて、相反する二つの考え方が示されている。石川女郎は、大伴田主に対して、自分の変装を見抜けず、求愛を受け入れずにそのまま帰したことを、「おそのみやびを」だと言っている。これに対して、田主の方は、女郎に非難された自分の行為を、逆に「みやびを」だと主張しているのであった。この贈答歌を、どのように理解したらよいのであろうか。

「みやびを」というものを、女郎が女の恋を受け入れる男の意で考えていることは、明らかであろう。女の恋を受け入れる「みやびを」だと噂に聞いて、女郎は田主に求愛を行なっている。それだから、女の恋を受け入れなかつた田主を、女郎はまぬけな「みやびを」だと歌っているのである。これに対して、「あなたを帰したわたしは、「みやびを」だったのだ。」と、女の恋を受け入れないことを「みやびを」だと切りかえしている、田主の論理とは、いかなるものであったのか。

田主が、「《そうだ。自分は「みやびを」だったのだ。……》と気づいた(助動詞の「けり」)のは、結論から言えば、これまで考えてきた「官人」としての「ますらを」のあり方を媒介としているに違いない。すなわち、女との恋の交渉を否定するのが、「ますらを」のあるべき姿なのであった。田主は咄嗟に、「ますらを」のこの論理を心に浮かべて、返歌し切りかえすことができたのである。このことを、整理して考えてみよう。

「みやびを」の語構成は「宮び男」であり、宮廷的な男という意味であつて、「みやびを」とは宮廷の理想的な男性像を示

す言葉であつた。そして、宮廷の男の理想像という点で、「みやびを」と「ますらを」とは重なつていた。重なっているけれども、二語のベクトルの向かうところはもちろん同じでなく、確かに違つてもいたのである。結論的に言えば、「みやびを」とは、男・女の恋の関係においての理想的な男性だつた。だから、女郎は、女性の恋を受け入れる男性という意味で、「みやびを」の語を理解しているのであつた。その意味では、女郎の恋を受け入れることができなかつた田主は、明らかに「みやびを」失格であり、田主は負けであつた。しかし田主は、咄嗟に「みやびを」を文字どおりの「宮び男」の意味に解し、宮廷男子のもう一つの、禁欲的な理想像をこの語にあてはめて、切りかえたのである。この切りかえしには当意即妙の意味のずらしがあり、田主はこれによって十分面目を保つたと言ふべきであらう。そして、「みやびを」をめぐるとこのような意味のずらしこそが、この贈答歌のおもしろさであり、そのおもしろさが、文学として万葉人に享受されているのである。こうした解釈の点で、この贈答歌はこれまで正しく読まれてはいなかつた。

本稿ではすでに、律令以前の古層の「ますらを」が恋の表現と結びつき、いわばその英雄性と恋とが不可分なものとしてあつたことを述べた。そしてまた、「ますらを」が律令官人の意味で使われると、「ますらを」に対して恋の禁忌表現が歌われるようになったことも指摘した。確認するまでもないが、この事実は、律令官人が異性と恋を禁忌としたということではない。これは歌の表現の問題であり、律令官人が女への恋を歌う

のは、「ますらを」性の喪失として表現していた。つまり、「ますらを」とは、男同士の関係による「官人」としての理想像なのであり、女との関係にあっては必ずしも理想的な男性像ではなかったのである。男・女関係では、「ますらを」でないこと、「官人」らしくないことを表現することが、「官人」としての男のたしなみであり、女に対する礼儀でもあった。だから、官人男性は、自分の「ますらを」性の喪失を、女性に対して恋の表現として歌っているのである。

そして、一方の、男・女関係における理想的な男のあり方が、「みやびを」なのであった。「ますらを」と「みやびを」とは、同じく理想的な宮廷の男を意味する言葉ではあったが、それぞれは、男・男の文化と男・女の文化という、異なった範疇に属しており、そこに重なりと違いとがあつた。その重なりと異なりとが、この贈答歌をおもしろく成り立たせている要素なのである。石川女郎は老婆の姿で田主に近づいているが、それが田主に「ますらを」の語を持ち出す正当性を与えている。つまり、田主は、女郎が、性的な対象でない、すなわち恋の対象ではない、老婆へと変装したことによって、女郎に「ますらを」として対することの失礼を免れているというべきなのである。

## 六 風流（みやび）の行方

この贈答歌に関して、以上のような読みが間違っていないことを示す、示唆的な贈答歌が、万葉の巻二十に載っている。

③あかねさす昼は田賜びてぬばたまの夜の暇に摘める芹子こ

④大夫と思へるものを大刀佩きてかにはの田居に芹子を摘みける  
(20・四四五五)  
(20・四四五六)

これは、葛城王（後の橘諸兄）と薛妙観命婦との贈答歌である。『万葉集』のどの注釈書を見ても、この贈答歌は、今まで正確に読まれ解釈されてはいない。

まず③の歌について。これは、葛城王が土産の「芹子」にかけて命婦たちに贈った歌であるが、この歌の表現がそもそもこれまで正しく読まれていないのである。例えば「夜の暇に摘める芹子これ」という表現は、文字どおりの意味としては「公務の暇な夜に摘んだ芹です。これは。」であるが、このように表面上の意味を理解するだけでは十分でない。この歌を正しく理解するために、本稿がすでに挙げた(a)の歌などを思い出してみよう。

(a)昼見れど飽かぬ田児の浦大君の命恐み夜見つるかも

この歌の表現が参考になる。この歌で、田児の浦を實際夜見たと考える必要はない。これは、すでに述べたように、昼間見ても見飽きないほどすばらしい田児の浦を見るのをがまんするという点、すなわち私的な欲望の抑圧に重点がある表現なのである。そして、それによって、大君に対する服従心（公務に対する忠実さ）を歌っているのであった。だから、実際に田児の浦を夜見たかどうかを問うことは、ほとんど無意味なのである。

③の歌で、「公務の暇な夜に摘んだ芹です。これは。」と歌っているのも同じであり、これは実際に葛城王が夜「芹子」摘み

をしたというよりも、こう表現することで、公務にいかにも忠実であつたかを歌っている。だから、「昼は田賜びて」という表現、すなわち昼は公務を忠実に務めたという表現が歌われているのだ。だいたい当時の貴族が、昼にせよ夜にせよ、手ずから「芹子」摘みをするはずがないではないか。「昼」と「夜」とは、公と私という対比の表現であり、その意味で、本当に夜に「芹子」摘みをしたと解釈するのは間違ひである。つまり、葛城王は、この歌で、自らの官人性、すなわち「ますらを」としての自負を歌っているのである。

そして、こうした葛城王の歌の意味を、薛妙観命婦は全く正確に理解している。その証拠に、③の歌にその言葉がないにもかかわらず、④の歌で命婦は、「大夫」と応じているのである。葛城王の歌に対して、命婦は、葛城王のいかにも真面目腐った官人としての態度を、「大刀を帯びての芹摘みは似合いませんよ」とからかい、歌で切りかえしているのであつた。つまり、即座の機知によって、命婦は、葛城王の表現した「ますらを」の不適切さをやんわりと咎めて、葛城王を見事にやりこめてるのである。

葛城王は、男性としてすべきでない、男同士の関係における「ますらを」、すなわち「官人」意識を前面に出して、命婦たち（女性）に対してしている。その点で葛城王は非難されるべきであり、そもそも「ますらを」として失格なのである。「ますらを」ならば、女性に対しては、「ますらを」意識の喪失という表現によって接するべきであり、それが異性に対しての礼儀であつた。では、なぜそんな過ちを葛城王はしたのか。命婦たちがか

なりの高齢であつたのか（葛城王自身当時四十六歳）、ともかく葛城王は相手が女性であること、異性であることを念頭に置かずに接してしまった。そこで薛妙観命婦は、「大刀」を帯びた官人と「芹子」摘みは似合わないですよと、官人意識で女性に対して非を暗に論じて、自分（たち）が女であることを忘れては困ると、葛城王をやり込めているのである。ちよつと艶っぽく、ユーモラスな歌であり、これぞ男・女の贈答歌といつたところであろう。「芹子」が女性の喩で、「芹子」摘みが女性との恋を暗示し、この歌は、女性との恋に官人意識で臨むことを述べて、葛城王の非を揶揄しているのである。「大夫と思へるものを」の句が、よくその揶揄を表現している。そして、それは意味的に、葛城王の命婦への態度なのであり、あなたは自分を女性として扱っていないが、まだまだ私も恋の対象である女性なんですよと、艶っぽく、ユーモラスに、命婦は葛城王をやりこめた。<sup>15</sup>

このような深い意味が短い歌には隠されており、この贈答歌のおもしろさは、こうした深い読みによってしか味わうことができない。そして、命婦の歌のこうした機微がすべて葛城王に理解されているのであつて、それだからこそ、葛城王は、左注がいうように、この二首の贈答歌を口ずさんで伝えているのである。葛城王は、よほど命婦の歌に感心し、この贈答歌が気に入っていたのであろう。

以上に取りあげた二つの贈答歌は、見てきたように、それ成り立たせている要素がよく似ている。後者の贈答歌では、葛城王（男）は「ますらを」意識で命婦（女）に対してしまつ

た。それは、命婦を異性ととの関係で考えていないからである。それに対して、命婦は、自分(たち)の女性性を暗示し、男・女の関係の「みやびを」を提示することによって切りかえている。一方、石川女郎と大伴田主の贈答歌にあつては、女郎(女)が「みやびを」の関係で田主(男)に對したが、田主は、女郎の変装した老婆が恋の対象としての女性ではないことに根拠を見つけ、「ますらを」意識によって切りかえている。つまり、いずれの贈答歌も、宮廷の理想的な男性を意味する「ますらを」と「みやびを」との関係によって成り立っているのである。その点で、二つの贈答歌は同じ構造をもつのであり、贈答歌のおもしろさも両者は深く通じあつてゐる。贈答歌のあり方を類似の表現構造として発見できたことにより、それぞれの贈答歌の読みの確かさが、納得されたものではなからうか。

最後に、「ますらを」や「みやびを」のこのようなあり方から、風流(みやび)の問題について考えておこう。すでに指摘したように、「みやびを」は、男・女の関係における男の理想像なのであつた。私的な男・女関係において使われる言葉であり、そこでの男に関する美意識なのである。<sup>(1)</sup>この事実によつて、風流(みやび)という美意識は、文字どおりは「宮廷風」という意味ではあるが、公の官人世界とは異なつた、私的な男・女の関係のなかで使われていることが、ここに明らかになつた。ということ、そういう私的な男・女関係に基盤をおく和歌や物語の中心的な美意識であることの理由が、これで明らかになつたということである。かの『伊勢物語』の「むかしおとこ」が、「身をえうなき物に思ひなして」都を出て、「いちば

やきみやび」をしたことが象徴的であるように、風流(みやび)は、「宮廷風」とは言いながらも、宮廷の政治世界とは異なつた、その意味で周縁的な、男・女関係の世界において盛える美意識なのであつた。今まで感覚的に何となく感じていた、風流(みやび)の周縁性の理由が、本稿によつて説明されたのではないかと思う。

## 注(1)

主な文献を挙げると、西郷信綱『日本古代文学』、上田正昭「社会と環境——ますらを論を中心として」(『解釈と鑑賞』第二四巻第六号、一九五九年五月、後に同『日本古代国家成立史の研究』収録)、遠藤宏「作者未詳歌と「ますらを」意識」(『論集上代文学』第一冊所収、一九七〇年十一月、後に同『古代和歌の基層』収録)、稲岡耕二「軍王作歌の論——遠神」「大夫」の意識を中心に」(『国語と国文学』一九七三年五月、後に同『万葉集の作品と方法』収録)、内藤明「万葉集」の「ますらを」と「たわやめ」(『早稲田人文自然科学研究』第50号、一九九六年十月)など。

(2) 別冊国文学『万葉集事典』の「ますらを」の記述(金井清一氏執筆)。

(3) 今後の作業においては、もちろん「ますらを」の漢字表記は意味をもたない。「大夫」という表記が、すべて官僚としての「ますらを」を意味するものではない。手掛かりとすべきものは、表記の奥にある、歌の表現なのである。また、それと関連して、古層の「ますらを」は、言うまでもなく歌の新古とは別であり、これについても歌の表現か

ら論理的に考えていくしかない。

- (4) 『万葉集』の引用は、講談社文庫本による。
- (5) 猪股ときわ「遊行」と歌垣——「遊行女婦」の発生まで——(『古代文学』29、一九九〇年三月)は、この歌などを取りあげて、「遊行」というプロセスを経て男・女がオトコ・オトメとなることを論じている。
- (6) 森朝男「景としての大宮人——宮廷歌人論として——」(『上代文学』五三号、一九八四年十一月、後に同「古代和歌と祝祭」「古代和歌の成立」収録)。
- (7) 多田一臣「大君の命かしこみ」について(『森淳司博士古稀記念論集「万葉の課題」所収、一九九五年二月)。
- (8) 注(1)の内藤論文もこのことを指摘している。
- (9) 野村忠夫「後宮と女官」。
- (10) 因みに、「ホモソーシャル」という視点から万葉歌を論じているものに、丸山隆司氏の一連の論文がある。藤女子大学『国文学雑誌』56(一九九六年三月)以下に、〈万葉集〉の生成①②とサブタイトルをつけて掲載されている。
- (11) 呉哲男「万葉集の歌を読むという行為をどう問いつ返すか。——「交友」論をめぐる——」(『国文学』第41巻6号、一九九六年五月)。
- (12) 例えば、辰巳正明「交友論——家持の同性愛説批判——」(『日本文学』第四四巻一—号、一九九五年十一月)などを参照。この論文は、呉哲男「万葉の「交友」——大伴家持と同性愛——」(『日本文学』第四四巻一—号、一九九五年一月)に対する批判として書かれた。なお、辰巳氏は、注(11)の呉氏の論文に対して再度「家持の性愛説批判(続)」
- (13) 『日本文学』第四五巻一—号、一九九六年十二月)を書いている。「交友」をめぐるのは、池田三枝子「家持・池主の交友観」(『古代文学』32、一九九三年三月)、同「家持の「交友歌」」(『古代文学』37、一九九八年三月)などもある。
- (14) 中西進「万葉と海彼」は、大伴旅人が、恋愛の手段であった和歌を文人の交友の方法として高めようと試みたと述べている。
- (15) 小島憲之「上代日本文学と中国文学」中巻。なお、その他の論として、蔵中進「石川女郎・大伴田主贈報歌」(『万葉集を学ぶ』第二集所収、一九七七年十二月)、相川宏「風流と都市のセクシュアリティ——石川女郎・大伴田主の贈答歌——」(『日本文学』第四一巻二—号、一九九二年十二月)、呉哲男「万葉の「風流士」——石川女郎・大伴田主の贈答歌をめぐる——」(『相模国文』20号、一九九三年三月)、辰巳正明「風流論——万葉集における古風と今風——」(『上代文学』第七十六号、一九九六年四月)などがある。
- (16) この贈答歌は、題詞によると、薛妙観命婦たち複数の命婦のところに土産と一緒に届けられたのであるが、薛妙観命婦は命婦たちを代表して返歌しているというよりも、男・女の贈答歌として、女の立場から歌を歌っているのである。要するに、女歌として相手の過ちを鋭く突いて切りかえているのであり、そのずらしや切りかえしこそがこの歌のおもしろさなのである。だから、葛城王の失敗の理由を命婦の年齢によって一応考えてはみたが、それは命婦たち複数への歌だったのでうっかり女性であることを意識しなかったのかもしれない、本当のところはよく分からない。

い。それは、いわばどうでもよいことであり、男の思わぬ失敗を鋭く捉えて、女歌として見事に男をへこましていることが理解されれば、それでよいのである。

(16) 呉哲男氏は、「万葉「風流」考」(『相模国文』23号、一九九六年三月)という論文において、『万葉集』を調査して、万葉の「風流」が「好色風流」だと述べているが、この指摘を本稿の視点によって読み変えれば、「風流」は男・女関係のなかで使われているということであろう。

なお、本稿の脱稿後に、吉田修作『文芸伝承論』が世に出た。吉田氏は、風流な、伝承の〈へをとこ〉〈へをとめ〉をこの本の中で詳しく論じている。

【付記】

本稿は、古代文学会の例会(一九九八年五月二日)において口頭発表した内容に、大きく手を入れて論文化したものである。